

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 11 日現在

機関番号：25201

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520688

研究課題名(和文) 解放前後時期の朝鮮宣教師のための朝鮮語教育に関する実証的研究

研究課題名(英文) Empirical research on Korean Language Education for Christian Missionary around the liberation period of Korea

研究代表者

呉 大煥 (Oh, Daewhan)

島根県立大学・総合政策学部・准教授

研究者番号：20340218

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円、(間接経費) 1,170,000円

研究成果の概要(和文)：近代韓国語教育の形成過程を明らかにすることを目的とし、米国や韓国に散在している宣教文書等の史資料を考察し、1920年～1930年代後半まで制度的教育機関が設立されたこと、その教育機関の設立に至る経緯及び言語教育の内容や、言語教育的発展等を証明した。また、解放後、1949年～58年までの宣教師による制度的韓国語教育の再開や、宣教師による韓国語教育を韓国の大学に委託することになり、1959年延世大学韓国語学堂の設立に繋がったことを初めて明らかにした。その結果、母語話者が主体になった近代的韓国語教育は、植民地時期の基督教宣教師による朝鮮語教育の発展の連続線上で成立されていることを立証した。

研究成果の概要(英文)：This study aims to clarify the process of formation of modern Korean Language Education. Through research of historical documents, this study has found the following. 1. The establishment and operation of Korean language education institution in the 1920s through late 1930s; 2. The process of the establishment of the institution; 3. The content and the development of Korean language education. 4. Furthermore, the research has found that institutional Korean Language Education for the Christian missionary has existed from 1949 to 1958. And a university in Korea was appointed to facilitate language education for Christian missionaries. In time, this led to the establishment of the Yonsei Korean Language Institute.

Therefore, it is concluded that independent modern Korean language education by Korean native speakers has been established in the process of the development as well as formation of Korean Language Education for Christian missionaries in the Japanese colonial period.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学、外国語教育

キーワード：外国語教育論・教育史 朝鮮語教育史 韓国語教育史 近代韓国語教育の形成過程 解放前の朝鮮語教育 基督教宣教師の朝鮮語教育 制度的言語教育

### 1. 研究開始当初の背景

近代的朝鮮語教育発現の萌芽である解放前後の時期及び植民地朝鮮時代の朝鮮語教育の発展過程については、まだ研究上の空白が埋められていない現状であった。こうした植民地時代から解放前後の時代の朝鮮語教育の蓄積がいかに 50 年の歴史を持つ朝鮮語教育へと継承されることとなったのか、また近代朝鮮語教育形成の萌芽となる時代の朝鮮語教育の言語学的意義をさらに立体的に捉えるためにはどうすればよいかという問題意識を基にして、本研究課題は、韓日の研究者により未だ手がつけられた痕跡がない、西洋基督教宣教師に対する朝鮮語教育の実態を史資料や元宣教師らに対する聞き取り調査を主体に明らかにする初めての取り組みであった。

### 2. 研究の目的

本研究は、近代的韓国語教育の形成過程を明らかにすることを目的とした。

そのため、韓国や米国に散在している資料を収集し、既入手資料の選別・分類方法にそくして、系統的に整理するを行い、次は、整理された史資料の検討・分析により、教育体系・教育カリキュラムなどの教育制度、教材・教授法などの教育内容、さらに 1920 年代以降 1958 年までの朝鮮語教育の歴史的变化を明らかにすることを目的とした。

また、韓国戦争後韓国に派遣された元宣教師らの朝鮮語学習・教育にまつわる貴重な証言収録を行うことを目的とした。

### 3. 研究の方法

の資料収集は、韓国のソウルや釜山等の大学図書館に所蔵されている教材や宣教師団体の会議録などの資料から関連資料を収集し、またアメリカ・ニュージャージー州の Drew 大学のメソヂストアーカイブやフィラデルフィア市の Presbyterian Historic Society に所蔵されている膨大な宣教文書の中から関連資料を閲覧し、朝鮮語教育に関する史料を集めた。

の朝鮮語教育の歴史的变化を明らかにするため、で収集した資料の分析をして、その分析結果の妥当性について海外研究協力者との協議を行い、歴史的事実を纏め、朝鮮語教育の変化の経緯を明らかにした。

の証言を収録することは、元宣教師らとの日程調整が合わなかったため、直接面談という当初の計画を変更し、海外研究協力者の協力を得て元宣教師らの組織の連絡網を利用し、電子メールで設問調査を行った。

### 4. 研究成果

この研究を通じて、近代韓国語教育の形成過程を明らかにすることができた。本研究の成果を以下のように、主に韓国語教育史の観点と言語教育学的な発展の観点からまとめる。他の成果も、最後に簡略にまとめておく。

### (1) 韓国語教育の歴史

基督教宣教師の機関誌である『The Korea Mission Field』とその会議録である『Annual Meeting of the Federal Council Protestant Evangelical Missions』の記録から 1920-30 年代末まで「Language School」という宣教師による朝鮮語教育機関がソウル市内に設立され、新規宣教師の朝鮮語学習を支援するため、主に宣教師が教育の主体になって朝鮮語教育を行ったことを明らかにした。1884 年初めて来韓した宣教師 Allen 以来、Appenzeller, Underwood などの初期宣教師は、朝鮮人の助使の助力をうけながら個人的な学習を通じて朝鮮語を習得した。宣教師達が、このような教育機関を設立した理由は、朝鮮の人々への基督教の伝導活動を円滑にするため、体系的な語学教育を実施し、より現地語に熟達した宣教師を養成することであった。このような語学教育機関の設立は、朝鮮地域だけのことではなく、宣教師が派遣された中国や日本を始めとする世界各地の宣教地域では一般的なことであった。宣教師の活動のためには、地域語の習得は必修であり、そのため、植民地朝鮮においても他の地域と同様に語学教育機関が設置された。

また、その教育機関の設立に至るまでの朝鮮地域の宣教師の朝鮮語教育・学習の経緯を明らかにすることができた。1900 年代までは、朝鮮語辞典や文法書、学習書など、個人的な朝鮮語学習に必要な書籍の刊行が活発であったが、教派を超えて「一つのプロテスタント」を目指すエキュメニカル運動の基で、1910 年以後、宣教師の夏期休暇期間を利用して各教派の宣教師を集め、朝鮮語教育を実施する「朝鮮語講習会」が 4 週間の期間で開かれるようになった。最初の講習会は、平壤地域の宣教師である Mrs. Baird が中心になって、1910-13 年まで平壤で行われた。1914 年度は H.H. Underwood の計画により、教育環境や衛生の問題があった平壤ではなく、ソウルで講習会が開かれたが、その後、この講習会が持つ限界を乗り越えるために常時的な教育機関の設立が求められ、ソウルに設立することになった。この教育機関は 1919 年の冬、2 ヶ月間の実験的な運用を経て、1920 年夏に「Language School」という名称で設けられて、少なくとも会議録の記録に残されている 1937 年まではこの機関が運営されることになった。

次に、朝鮮解放後の宣教師による朝鮮語教育の実態を明らかにした。1938 年以後、総督府の皇民化政策に伴うミッション系の私立学校への神社参拝の強要や 1942 年太平洋戦争勃発を原因に、宣教師は朝鮮から追放されたり、離れたりした。朝鮮解放後、再び宣教師は朝鮮に戻ってきて、メソヂスト教派を中心に宣教師による制度的韓国語教育が 1949-58 年まで「Korean Language School」という教育機関で再開された。このことを本研究で初めて確認し、報告した。また、1950

年からの韓国戦争の渦中には、日本の軽井沢に避難して、韓国と日本に新規着任した宣教師に語学教育を行うことになった。

このような宣教師による朝鮮語教育は、1959年韓国延世大学の韓国語学堂の設立に繋がり、韓国の近代的韓国語教育の母胎になったことを確認できた。韓国戦争後、韓国に戻ってきた宣教師による韓国語教育は、戦争後の混乱している社会状況の中で校舎の問題及び時間制教員の問題や地方からソウルのこの機関に韓国語を学びに来ている宣教師の宿舍問題など様々な韓国語教育を巡る問題点と直面することになった。このような問題を解消するため、メソヂスト教派の宣教師は、1958年会議で延世大学、または他の協力的な支援が受けられる適切な機関で、韓国語コースを設立することを他の宣教師と議論することと決議し、その後、延世大学校の方と優先的に協議をした。その結果、『延世大学校韓国語学堂 50年史』に記載されているように、「基督教宣教師代表5人と延世大学校の朴チャンヘ教授が集まり、延世大学校に韓国語学堂を設立することを決議した。」この記録により、1920年から始まった宣教師による朝鮮語教育が1959年の延世大学の韓国語学堂の設立に繋がっていることが判明した。即ち、韓国における近代的韓国語教育は宣教師による朝鮮語教育の発展過程の連続線上で形成されていることを初めて立証した。

## (2) 言語教育学的発展

宣教師による朝鮮語教育の史的考察の中で、初の制度的言語教育機関であった「Language School」の朝鮮語教育の内容及び教育課程や教育制度などの言語教育学的側面の発展過程も明らかにすることができた。この教育機関は、1919年の試験的な運営過程を経て、当時既に語学教育を実施していた中国の南京・北京及び日本の東京にある言語学校の教育課程を調査し、標準課程を用意し、1920年度の語学教育を行った。この機関は、1919年の臨時カリキュラムによる朝鮮語教育の実施から、1920年、1925年、1927年、1930年、1934年の全5回のカリキュラム改定をして、当時の状況に合わせて朝鮮語教育を行ったのである。最初のDirectorは、H.H. Underwoodが務め、1930年のカリキュラム改定が行われる前まではこの教育機関を管理した。H.H. Underwoodが朝鮮クリスチャンカレッジ(延世大学の前身)での職務に専念するようになった1930年度からは、M.B. StokesにDirectorが変わって、大幅のカリキュラム改定が行われた。また、1934年AppenzellerがDirectorになってからは、1927年度のカリキュラムを基にしたカリキュラム改定が行われ、教育内容も1927年のカリキュラムに変わった。この機関の学制は、設立当時から1924年度までは、1年2学期の2年制だったが、1925年度のカリキュラムか

らは、3年制と学制が代わり、設立当初の計画が完成された。1925年度のカリキュラム改定で3年制になった学制は、その後のカリキュラム改定の時も変わることなく、続けられた。

5回に渡るカリキュラムの改定の中で、教科目の変更などがよく行われたが、長年使われ続けた代表的な教材は、1年目の『Korean for Beginners』と2年目の会話教材の『Every-Day Korean』である。この2冊の教材は、Language Schoolの機関用として刊行された教材で、『Korean for Beginners』(1925)は、1930-33年の間はカリキュラムから排除されたが、1934年のカリキュラムから再び採用され、1年目の主な教材として長年使われた。『Every-Day Korean』(1920)は、1919年度の臨時カリキュラムには、ただUnderwoodが準備している教材として記載されていたが、1920年度のカリキュラムではUnderwood著の教材として採用され、最後の改定カリキュラムである1934年のカリキュラムが実施された時期まで、即ち、「Language School」の全教育期間に2年目の会話教材として使われていたと思われる。

まず、『Korean for Beginners』は、メソヂスト宣教師であるC.A. Sauerが著したもので、本研究により初めて学界に紹介された。この教材は、当時の新教授法である『The Phonetic inductive method of Language Study』(T.F. Cummings)の原理を受け入れ、『How To Learn a Language』(T.F. Cummings)で提案された「ヨハネの福音書」を利用した授業モデルを朝鮮語教育に適用したものである。著者のSauerは、1920年代の記録上、朝鮮語を教えたことはなく、英語の教員の経験はもっていたようだが、T.F. Cummingsの影響を受け、当時の朝鮮語教材や学習書の中では前例がない斬新な教材を作り上げた。著者のSauerは、後ほど1949年からのKorean Language Schoolの責任者になり、同機関の多数の教材を刊行するなど、宣教師による朝鮮語教育の重要人物でもある。

この教材は、全4部で構成され、1925年のカリキュラムの様々な科目に各部が教材として用いられた。

この教材は、基本的に教授用というよりは、学習用として構成され、「Introduction」には1) Learning to Speak, 2) Learning to Read, 3) Learning to Write, 4) The Mastery of Pronunciationなど学習法を詳細に説明している。このように学習用という目的になっているのは、当時の朝鮮語教育の事情に起因することで、クラスを担当している朝鮮語ネイティブ話者は正式な言語教育の訓練を受けている教員が少なく、殆どの人が言語学習の助人(helper)にすぎなかったため、朝鮮語教育を受けるものは、ネイティブ話者の助力を受けながら学習を進めざるを得なかったためであると判断される。

とりわけ、教材の構成面から見ると、この教材の第1部「The Korean Language Taught through John's Gospel」は、英韓対訳の聖書の一部である「ヨハネの福音書」を利用して30課で構成されている。宣教師ならよく知っているはずの聖書の多様な朝鮮語の例文を読み、暗記し、学習者が帰納的に朝鮮文の構造や構成原理を把握して他の朝鮮文に応用できるような仕組みをとっている。

全体19課で構成されている第2部「Supplementary Drill and Conversational Tables」は、会話練習のためのドリル練習とダイアログの朝鮮語会話の表を提示して、当時の最新の会話練習法を適用したものである。第2部の特徴は、語彙交代法や補充法など、この教材以外のものでは使われたことがない会話練習法を提示していることである。このような練習法を使っていることの意義は、形式的な文法学習や翻訳を排除し、文法学習の代替材として会話練習を取り入れていたことである。この教材の内容にダイアログの会話とドリル練習が適用されたことで、ただ会話体の本文の暗記や翻訳を行った以前の朝鮮語教育とは違う真の会話教育が始まったと主張しても間違いはないだろう。

この第1部と第2部は、この機関の1年目の科目の教材として、週5回用いられた。

第3部「An Introduction to Conversational Korean」は、朝鮮語会話文を紹介している。9つのテーマ別会話文と語彙集で構成されている。第3部の執筆意図は、序文によると、初級学習者が特定状況に必要な適切な語句を学ぶ際、役に立つ資料としての会話文例を提示しているということであった。語彙集には、朝鮮語の語彙339個に英語対訳が簡単につけてあるもので、語彙集の序文には、語彙の学習方法や暗記方法なども紹介されている。第3部は、1年2学期目の「Expression」科目の教材として週1回用いられた。

第4部「Grammatical Notes on Korean for Beginners」は、第1部と第2部の文法項目に関して英語で簡単に記述しているものである。他の文法教材と異なる点は、詳しい文法記述は出来るだけ避けて、項目を羅列的に記述し、重要な部分はUnderwoodの『鮮英文法』の該当部分にインデックスをつけていることである。文法事項にインデックスのみをつけてある理由は、序文に書いてあるように、教室で文法教育を直接行うことを避けて、当時の権威がある朝鮮語の文法書と理論書を参照することを薦めているためである。従って、文法項目に対する「最小限の参照」が有益であると判断し、第4部の文法ノート執筆したのだらうと推測される。この機関のカリキュラムでは、1年1学期目は週3回、2学期目は週2回、「Grammar」科目の教材として用いられた。

以上のように、この教材は、Language Schoolの朝鮮語教育の内容について把握できる端緒を提供しており、当時の言語教授法

が文法中心ではなく、会話練習中心であったこと、また、このような教授法の適用により、世界的な言語教育法との関連性が分かる重要な資料である。

『Every-Day Korean 日用朝鮮語』は、この機関の責任者であったH.H. Underwoodが著したもので、前述したように、この機関の全存続期間中使われた教材である。本研究で報告されるまでは、学界の注目を浴びたことがなく、単に学習書と紹介されただけであるが、本研究により、Language Schoolの主な会話教材であったと評価されるようになった。

この教材は、会話教育を目的として作られ、全35課のテーマ別会話文と語彙集、各種単位(測量単位、時間単位、親族関係図等)の紹介などで構成されている。序文と目次は英語で記述され、会話本文は漢字で書かれた各課の数字以外は全てハングル表記になっている。英語対訳はない。序文には、ハングル表記の原則が書いてあり、基本的には総督府の朝鮮語辞典の表記に従うが、通常の発音を伝達するため、文末語尾の縮約形は現実音を表記に用いたことが分かる。しかし、本文中の単語表記の揺れが現れているので、統一した綴字法の規範に徹底したとはいえない。本文は、会話に参加する者2、3人による関連テーマの会話連続体(conversational sequence)が記載されている。会話教育に日常的な会話のダイアログが適用されているのは、当時の教材や学習書では珍しいことで、この教材が持つ特徴ともいえる。また、会話参加者の身分も多様で、身分の上下関係による敬語法の使い方や言葉の選択なども帰納的に学習できる長所がある。序文によると、ネイティブ話者は常に使うが外国人は殆ど使うことがない語彙及び語句について学習者の注意を呼び起こすために、また、成功的な宣教活動に必修的な個人間の接触の場面で使える語句や表現が役に立つように、この教材を構成したという。そして、会話文の語彙及びテーマの選定、企画は著者のUnderwoodが担当し、文の構成はネイティブであるS.K. Ohが担当した。この教材は、2年目の会話教材として1年間用いられた。以上、この教材は、多様な身分の会話参加者が登場する朝鮮語会話文を通じて、実際朝鮮のネイティブ話者が使っている「日常語vernacular」を教えることを目的とし、主な会話教材としてこの機関の存続期間中使われた代表的な教材である。

(3) 朝鮮語教育の衰退の原因(未発表論文より)

この機関に関する記録は、1937年以後の関連文献から姿を消したため、前述したように、1930年代末にその役割が終わったと判断される。このように、1930年代末に宣教師による朝鮮語教育が衰退したことは、日本人に対する朝鮮語教育の衰退と時期的に同様であ

るため、総督府の政策変化が影響していると思われたが、単に総督府の政策だけではなく、朝鮮宣教部内部にもその原因があったことが分かった。

朝鮮総督府の基督教系の私立学校に対する牽制が原因であるという既存の解釈を否定することができないが、朝鮮宣教部の内部の問題として、以下のことがあげられる。

まず、1910年代の講習会が可能となった理由を検討すると、19世紀末行った世界基督教宣教の「一つのプロテスタント」を目標とするエキュメニカル運動の影響で宣教地の基督教の事業は教派合同で推進されることが強力に奨励され、1905年朝鮮地域でも初めてメソヂスト教派とプレスビテリアン教派が共同で「韓国福音主義連合公議会(The General Council of Protestant Evangelical Mission in Korea)」を組織し、朝鮮における宣教活動を共同で行うようになったという背景がある。このような教派連合の宣教部が組織されて行われた事業の一つが、新任宣教師のための講習会を通じた朝鮮語教育であったし、Language School の設立でもあった。即ち、教派連合の共同事業推進と新任宣教師の増加は、宣教師による朝鮮語教育を制度的に実施・維持することができる原動力であった。

しかし、1920年代後半から朝鮮内の朝鮮人基督教指導者が増え、宣教師が担当していた仕事が朝鮮人に任されることになり、来韓する新任宣教師の数が減ることになったため、新規登録者の減少により制度的教育機関の維持は困難になる筈であった。また、朝鮮人の基督教指導者の増加により、伝導活動及び教会の運営も担当することになったので、宣教師との教会運営を巡る葛藤が生じるようになった。さらに、総督府の神社参拝強要により、神社参拝を認める問題が原因で教派連合に亀裂が生じたので、1930年代後半に入って連合は維持できなくなったのである。

以上のように、総督府の政策の影響は勿論、宣教団体の内部の葛藤による教派連合の亀裂により、また教育機関の新規登録者になる筈の新任宣教師の着任人数も減ったので、1930年代末になると、朝鮮語教育は衰退する一方であり、1942年太平洋戦争の勃発による宣教師の追放などによって朝鮮においてはその幕を閉じるようになったと思われる。

#### (4) 元宣教師を対象とした設問調査

なお、韓国戦争後新規着任し、宣教活動を行った経験がある元宣教師を対象とした設問調査は、平成23年と24年に2回行った。2回にわたって、1960年代以後韓国で活動していた元宣教師の延べ20名からの貴重な証言を集めることができたが、まだこの証言内容を裏付けることができる文献が未発見の状態であるため、再度アメリカのアーカイブでの資料調査が必要となっている。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 5 件)

呉大煥、解放前基督教宣教師のための朝鮮語教育に関する記録の発掘、韓国語教育、査読有、第22巻3号、2011、177-194

呉大煥、Korean for Beginners を通じて見た解放前の朝鮮語教育-初刊本(1925年)を中心に-、韓国語教育、査読有、第23巻3号、2012、159-193

呉大煥、解放後の基督教宣教師のための韓国語教育機関の歴史的意味-Korean Language School(1949-1958)-、言語と文化、査読有、第9巻2号、2013、173-191

呉大煥、基督教宣教師のための朝鮮語教材『日用朝鮮語(EVERY-DAY KOREAN)』に関する考察、査読有、第24巻3号、2013、161-186

呉大煥、日本における韓国語教育の特徴-KFLのアイデンティティの再考のため-、言語事実と観念、査読有、第31集、2013、59-77

[学会発表](計 5 件)

呉大煥、H.H. Underwood の『Everyday Korean』に関する考察、韓国語研究会、2011

呉大煥、1925年判 Korean for Beginners に関する考察、韓国文法教育学会国際学術大会、2012

呉大煥、1920年代以降の基督教宣教師のための朝鮮語・韓国語教育、朝鮮語教育研究会、2012

呉大煥、基督教宣教師のための韓国語教育機関 Korean Language School(1949-1958)、韓国言語文化学会国際学術大会、2013

呉大煥、近代的韓国語教育の形成過程-解放前の朝鮮における日本人と基督教宣教師による朝鮮語教育に関する史的考察を中心に-、韓国言語・文学・文化国際学術大会、2014、招聘講演

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

呉大煥 (DAEWHAN, Oh)

島根県立大学・総合政策学部・准教授

研究者番号：20340218